

女学生の絆

—明治二十年代の『女学雑誌』掲載小説を通して—

香川由紀子

キーワード 『女学雑誌』、交際、朋友、シスターフッド、キリスト教主義女子教育

一、はじめに

明治五年の学制発布以降、次々に設立された私塾に女子が通学するようになり、「女学生」が誕生した。欧化主義政策の進められた明治二十年頃まではキリスト教主義女学校が女子教育の中心となり、近代西洋教育を受ける娘達の姿は二葉亭四迷『浮雲』（明治二〇年）を始め、田辺花圃『藪の鶯』（明治二一年）や木村曙『婦女の鑑』（明治二二年）など小説にも描かれるようになる。

明治一八年に創刊された『女学雑誌』¹にも、発刊に関わった巖本善治自身が月の舎しのぶ（主人）の名で書いた『梅香女史の伝』（明治一八年八月～一九年八月）、『薔薇の香』（明治二〇年七月～一一月）、『白蓮談』（明治二一年一月）、『哲女の巻』（明治二一年八月～一二月）の他²、女学生の登場する小説がいくつか掲載された。これらは、勉学に邁進して女学を広めようとする女学生の、真の幸福を求めて迷う姿を示すことが主眼であるが、同時に、学友との英語交じりのおしゃべりや、寄宿舎の生活環境、男女交際についても描かれるようになり、女学校という場が提供した新しい人間関係を呈示した。

本稿では、小説「薔薇の香」と「浮雲胸」（雲峯子、明治二四年）を始め『女学雑誌』に見られる言説を中心として、近代に入って結ばれるようになった女性達の新しい人間関係に注目し、〈友情〉の捉え方の変化をたどる。巖本のキリスト教精神とホーム論に裏打ちされた理想の女学生像の内に見られる、近代西洋教育の普及によって生まれた女学生達の絆を浮き彫りにしたい。

二、文明化と女性の交際

明治三二年高等女学校令の発令によって女学生は急激に数を増やした。彼女

達のファッションや言葉は良くも悪くも世間の注目を集めるようになる。「女学世界」(明治三四年創刊)、「少女界」(明治三五年創刊)、「少女の友」(明治四一年創刊)など彼女達を対象にした雑誌も数多く刊行され始め、いわば女学生は一定の社会的価値を持つ存在となった。こうした明治後期から大正、あるいは昭和初期にかけての女学生像についてはこれまで多くの研究がなされてきた。³特に本稿で扱おうとする女性の連帯、友情については、本田和子氏の〈少女幻想共同体〉、川村邦光氏の〈オトメ共同体〉に代表されるように、若い女性達が雑誌投稿欄などを通して独自の言葉を使い、「乙女」や「女学生」の名の下に集うことによって一種独特の世界を作り上げたことが指摘されている。また、結婚までのいわゆるモラトリアム期間にある女性同士の親交についても研究は多く、「安全な」友情か「危険な」同性愛かに分断して論じられたり⁴、女性同士の絆が男性嫌悪や女性同士の肉体的な結びつきへの願望にもつながることが指摘されたりしている。

これらの研究において、女学生の結びつきは、教育者やメディアによる軌道修正や非難を受けながらも基本的には彼女達自身の欲求によって形成されてきたという前提で捉えられている。しかし女学生誕生の当初から彼女達に親交を深めようとする自発的欲求があったわけではなかった。文明開化は女性の際際に対する考え方を一転させ、女性達はそれに振り回される形で交際を始めた。明治二〇年前後は欧化主義政策により、交際を最も奨励した時期であった。まず明治初期の女性達の交際がいかなるものであったのか、当時の言論から見ていくことにしよう。

交際について記したのものとしてまず福沢諭吉の『男女交際論』(明治一九年)が挙げられる。開化期の日本は西洋に倣って男女を同席させるようになり、「男対女」の交際法が説かれるようになる。『男女交際論』はその代表であるが、福沢の言う交際とは異性の交際ばかりでなく同性、特に女性同士の交際をも含んでいる。この著で福沢は「(交際は)男子と男子との間に行わるゝのみにして、婦人と婦人との間には甚だ淋しきの一宇なり」、「古来日本国にて朋友と称し交際と名くるものは唯男子の専にする所にして、婦人にして朋友ある者を見ず。」⁵と指摘した。続く『男女交際余論』(同年)では、「多言は婦人七去の一箇条」、つまり儒教の教えでは言葉が多いのは離縁される七去のうちの一箇条であったため女性は談話が苦手であるが、これからは「交際の方便」として「談話の種子を作る事」が重要である、それも他人の噂や芝居音曲の品評だけでなく、社会全体についての有様を知ることが大切であると述べている。⁶つまり福沢は「交際」の内実を「談話」と見ており、文明社会の女性は「談話」を持つべきであると提唱したのである。

「女性に朋友がない」とする発言は、『女学雑誌』にも見られる。明治二一年「女性の朋友」と題した社説に、朋友とは「霊と霊とが結び付いたもの」であるが「日本の婦女子に朋友なし」⁷とある。女子の交際の性質は、車が同じでなかったり席が隣でなければすねたり、洋服や花簪をそろいにしたり、外見は真の姉妹のように見えても内情は決して知らせまいとするなど、男性の目から見ると非常な相違がある、というのである。

こうした言説が誰によって語られたかは注意すべき点であり、女性同士の関係が男性同士のそれとは「非常な相違」を呈していたかどうかは一考を要する問題であろう。女性の側から見ればむしろ男性の「朋友関係」こそ上辺だけのものであるという言説も見られる。⁸また、乳姉妹や、富家の令嬢とその家で働く同じ年頃の娘の関係については、その絆の深さが小説に度々描かれる。樋口一葉『五月雨』（明治二五年）は、富家の娘優子とその侍女八重の絆を描く。両親を失って妾になれという男を逃れ東京へ出てきた八重を、優子は「女子同志は互ひぞ」という同性としての共感から家に招き入れる。八重は優子に「真実の同胞」の感情を抱き、自分の慕っていた男性が優子の想う人であると知ると身を引く。二人は偶然にも乳姉妹であったことが判明するのだが、二人の関係は女性同士の心、言い換えれば「霊」の結びつきの範疇に入れることができる。また、三宅花圃の『八重桜』（明治二三年）では、主従関係といえども総領娘時子は下女お八重にとって「最も親愛する」女性なのであり、その結びつきは血のつながった家族よりも深い。このように近代教育の普及以前の女性達が女性同士の交わりと全く無縁であったわけではない。乳姉妹、主従関係という点においてはいわば男性も女性も同じような絆を結んできたのである。

しかし、明治の社会が女性に望んだのは義によって結ばれた関係ではなく、社会的で対等な関係、まさに福沢が〈society〉の訳語として使用した「交際」⁹であった。独立した対等な人間が「談話」によって親しみのこもった結びつきを得ることであった。そして女子教育の基軸に据えられてきた、「多言」を「悪しきこと」とする儒教的考えが、女性の「交際」を阻んできたのは確かであったと言えよう。

一方、女性の側からの発言としてはどうかというと、『女学雑誌』に中島俊子が「虚名や義務のみでない交際」の必要性を説いている。ここでは交際する者自身にとって楽しく心地よいものであるべきことにも目が向けられている。

既に友人たる以上は互に相気張合を廢隔意なく可成己が知ぬ事を問はん考となり又問はれもせば可成知る事は答などする考となれば互に打解て楽しき交りと変するを得へし問方は人に咲はれんかななどの考を起すものなるが

答る方に取ては毫も問人の如き考を有すして唯心易き親き思を為ものなるべし此の如くして一二の交際より多人数の会合に及ぼさしめば僧侶の禪堂も俄かに百花馥郁の芳園と変して麗しき実菓を結ふに至るべし¹⁰（傍線筆者、以下同様）

俊子が挙げた「楽しき交わり」の具体的な良策もやはり「問い、答える」という、談話から始めることであった。しかし、方策を提示されたからと言ってすぐに交際を始められるものではない。そこで実地練習の場も設けられるようになっていく。

女子交際会なるものを設け、麹町女学校に於いて、毎月二回ずつ同士を会合して談話会を開き、互いに交際を結び知識を交換して、我が国の女子に独立自主の気を養成せしめんとて、毎月一回ずつ雑誌を発行して、会員に頒たるるという。¹¹

談話を中心とする女性の交際会は都心部のみでなく東北など地方でも大いに流行するようになるが、別の新聞記事からは、西洋を意識する余り「八十余円を抛ちて身体に合わぬ洋服をこれ見よがしに着飾りて出席する」¹²など、本来の趣旨を見失っていく様子も見られる。同記事はこれに苦言を呈する投書が寄せられたことも報じているが、この投書の批判もまた「元来西洋にては、踏舞会或いは談話会その他の公会の席には、必ず夫婦（娘あればこれを伴う）打ち連れて臨席し、婦人は仮し以前は己れの親友たりとも、既に結婚する以上は、必ずその夫の許可を得るにあらざれば、その人とみだりに旧盟を暖むることあたわざるほどに嚴重なるものなるに、それらの慣習をも詳らかにせずして、ただ交際さえすれば非常の利益あるよう心得るは、いかにも歎すべき次第なり」と、西洋に倣うことをよしとする基本姿勢を崩してはいない。女性同士の交際への批判にしてはいささかの外れであることがむしろ、西洋を雛形として手探りで女性の交際のあり方を模索しているこの時期の様子を際立たせている。

いったい日本が模倣しようとした西洋の女性の交際は、「知識を交換して」、「独立自主の気を養成せしめ」るものだったのであろうか。一九世紀初頭のロンドンを舞台にしたサッカーの小説『虚栄の市』では、社交界の女性達の様子がアイロニカルに描かれている。

彼女はもの静かで、やさしくて、あまり美し過ぎもしなかったので、夫人連にどちらかといえばいい印象を与えたのだが、そのうちに第百五十連隊

の会食をすまして帰って来た紳士たちがあんまり彼女をほめ立てたので、もちろん夫人連はすぐに彼女のあらさがしを始めたのだった。¹³

『虚栄の市』におけるこの表現は、作者が男性の視線で滑稽に描こうとした意図的なものではあるが、女性の交際が常に男性を意識して交わされるものであったという面を露にしている。欧米の女性達の交際の内実は、必ずしも日本が理想に掲げて推進したような知識の交換や独立自主の気を高めあうものではなかったことを示唆するのである。これについては、実は談話による交際の必要性を説いた俊子自身によって、後に実感されることになる。明治二五年一月、イタリア公使になった夫信行と共にローマに滞在した俊子は、後年、次のように回想している。

欧羅巴だからつて同じで、やつぱり女ばかりが寄ると、時候の挨拶だとか、着物の縞の話だとか外部ばかりの話をして、何も面白いことはないよ。ドウも女は御免だ。¹⁴

日本の提唱した女性の交際のモデル像は、西洋イコール文明社会としてこれに追いつこうとするあまり、現実の西洋よりも理想化されて明治の女性達に適用されていったと言えよう。

三、「朋友」の意味

文明化は当然、教育とも関連していなければならない。明治二〇年まで日本の女子教育を先導していたのは、女子教育施設の約半数を占めていたキリスト教系女学校であった。新知識の必要性を謳ったキリスト教主義女子教育は、福沢達によって提唱された文明社会の理想の交際をどのように取り込み、それはまたどのように進展させられていったのだろうか。福沢や俊子の発言に見るように、「交際」は「朋友」、「友人」という言葉と並列して語られてきた。「交際」が目的とするところは「友」を得ることである。ここではまず、編集者の巖本善治をはじめ多くのキリスト者が寄稿した啓蒙的雑誌、『女学雑誌』に掲載された小説「薔薇の香」を通して、「友」という言葉の意味がどう捉えられているかを追ってみることにする。

「薔薇の香」は、女権論者で教育家の青山哲という一人の男性と、「沈着た考の深そうな学者風の」白河光、「綺麗な着物を着て居る一番美しひ」波羅香の二

人の女学生の関係を中心に描く。哲の妹、清は「宣教師の寄付によって建てられた英和女校」に通い、光と香はそこを卒業し今は東京女学に通う女学生である。ここには夕食後に二、三人ずつ手を繋いで散歩したり、七、八人が一組となって西洋風鬼追遊びをしたり、オルガンを弾いて唱歌を歌ったりするというような、キリスト教主義女学校から伝えられ広められた女学生特有の西洋式の団欒や交流も書き込まれるようになっていく。哲が妹に「学校に好い友達がありますか」と尋ねると、清は「ありますとも大へゑんにありますワ」と答えている。「薔薇の香」には「朋友」という言葉が度々登場するが、「朋友」の概念は、まずこうした女学校生活を通して交流を深める「友達」として示された。第七回（七三号）は「朋友の愛」という小題がつけられ、香と清が光の家を訪ね、その夜行われた交際会で披露された光の文章や香の演説の出来を称えあう場面が描かれる。三人の関係は「親しき朋友」と表現されているのである。

女学校は同年代の「朋友」を作る場を提供した。特に、神の下に平等で質素堅実であることを基本理念として謳い、寄宿舎を兼ね備えていたキリスト教主義女学校は、若い娘達が共同生活し、家族や主従関係、階級意識をも離れた交流を経験する場として大きな意味を持っていた。¹⁵また多くのキリスト教主義女学校には、「王女会」と呼ばれる受洗者達の自治会があり、十人を一組として各々モットーを組の名に冠し、週一度各組で集まっては信仰の修養ほか、慈善事業の資金を得るための手仕事を行った。編物などの手仕事をしながら、女学生達はおしゃべりを楽しんだ。

このようにキリスト教系女学校において、女性達は談話による「楽しき交り」を結び「朋友」を作るに至った。しかし光の心情に視点を移すと、「朋友」はさらに深い意味を持って捉えられているのがわかる。光は、女学校の友達に着物のことばかり考える者やろくにもも言わない者ばかりで「アア人と云ふものは頼めないものでそしてほんとうの朋友と云ふものはありませんねー」と嘆く。女学校の級友には「朋友」を見出せなかった光が、「朋友」として認めたのは男性の哲である。共に「偏屈の似たもの」と噂される哲と光は、お互いの学問に対する姿勢や思慮深さに尊敬を抱き共感する。第三者の目からは、二人を結びつけているのは「高尚の友情」と表現され、光自身、哲を「無二の朋友」と告白する。つまり「朋友」の概念には、男女間で結ばれる絆も含まれることが明らかになる。そして同時に、この背景にある欧化主義期の「男女交際」奨励の意図と内実も浮かびあがってくる。

男女交際は女学生を対象に教師達によって勧められた。小説中には、清が、書物ばかり読んでいる女権論者の兄を「校の先生が始終そう仰しゃいますから何日か居らつして少し生徒方と交際なさいまし」と誘っている会話が見られる。

また光と香が通う東京女学では交際会を開催し、光の学校の生徒達を招待する場面も登場する。

その此頃は追々と交際が盛んになりましてね、あちらでも此ちらでも男女うちまぜての會がありますがどうも弊が多くっていけませんから、うちの学校の先生はあゝ云ふお方ゆへ、どうか立派な雛形になるような交際会を起こしたいって、お催うしになるんですが……¹⁶

右の香の言葉の通り、明治十九年頃には実際に官立の学校の生徒によって男女交際の雛形が作られようとしていた。『女学雑誌』にも「高等女学校の生徒と帝国大学の学生等をして共に踏舞を習はしめ一踏舞会を起し男女交際の手初めを成さしめんやう計画の中よし」¹⁷との記事が掲載されている。

特徴的であるのは、小説中には男女交際の成果も書かれていることである。「頭脳は踏舞乗馬交際の鹿鳴館」といかにも西洋かぶれの「軽佻浮薄」なイメージで書かれる香は、光とは全く異なる性格で、従来の多くの小説で不幸な結末を迎えたタイプの女性であった。¹⁸しかし、哲との交際によって、香は「厳肅」になり、一方、哲は「和らかく」なる。「段々と真正の真実をもつて交は」るようになり、遂には香が「立派のホーム」ができる相手とみなされるようになるのである。この変化は、二人の交際について噂する女学生によって「ソレガ即ち男女交際の結果よ」と語られている。

ここでは、光と哲のように似た考えを持つ二人であれ、香と哲のように正反対の性格の二人であれ、交際は男女の距離を精神的に縮めるものであり、「朋友」関係は性別を越えて結ばれうるものとして提示されている。この時期、「恋愛」という言葉が〈love〉の訳語として書物に姿を現し始め、人々は実践に苦勞しながらも、肉体のみによらない男女関係を西洋的、近代的であるとして理想に掲げていた。¹⁹肉体によらない関係とは、即ち「談話」による交際である。「朋友」という言葉の持つ「霊の結びつき」という意味は、このような近代的男女関係を指すようになっていくのである。

キリスト教を日本に伝え、女学校を開設した宣教師達の母国である十九世紀前半の米国において、女性達は夫を〈friend〉、〈nearest friend〉、〈best friend〉、〈friend and companion〉と呼んでいた。〈friend〉とは、キリスト教に基づいた〈heart〉を重視する絆を指した。²⁰こうした事情を巖本が知っていたかどうかは定かではないが、キリスト者であった巖本はプロテスタントの教えに准じて、夫婦の絆を第一とし、妻には夫を助け居心地のよい家を作る重要な役割があるとする「ホーム」論を『女学雑誌』において展開した。夫婦の絆は当然の如く

〈love〉によるものでなければならないが、巖本にとっての〈love〉とは「深く魂（ソウル）より愛する」²¹ことであった。換言すれば先述の『女学雑誌』の社説に見られた「霊と霊とが結び付いたもの」、すなわち「朋友」となり、「ホーム」は「朋友」である夫婦によって作られるべきものということになる。つまり西洋の「〈heart〉によって結ばれた〈friend〉としての夫婦」が、「霊によって結ばれた『朋友』としての夫婦」に移し変えられたと見ることができよう。

「朋友」という言葉は霊と霊で結びついた結婚を目指す男女の関係に当てはめられ、交際は、その相手を正しく選ぶための手段となるべきものであった。ところが、現実には理想通りには進まない。「薔薇の香」は結婚をめぐる男女の考えのずれを描くことにより、新しい現象を表す言葉のみが独り歩きを始め、現実の感情と葛藤を起こす様子をも映し出している。

哲の心情においては初めから結婚相手と「朋友」とは区別されている。「『親密なる交際』と夫婦の相性とは全く別物です」、「斯く親密に仲が好くっても之は朋友として交わるから善いのであって共にホーム（家）を持つに適當すると云ふ所の性質ではないと知っているデス」という言葉通りに光との結婚を望んではいない。一方、光は、哲と香との婚約の噂が流れると、気鬱から病気になる、うわ言で哲の名をよぼほど心の奥では哲を慕っている。霊で結びついた友人として尊敬を寄せると同時に、思慕の情も持っているのである。哲はそれを見て、「だからウイ、シャル、ネバー、マーリー（吾輩等は到底婚姻しますまい）と云ふ看板を懸けて初めから交際する訳で白河さんダッテ其理屈は知っているに違ひないデス」と当惑する。

「朋友」が結婚相手とはならないという哲の心を示す伏線として、二人がイギリスのジョージ・エリオットの小説『ミドルマーチ』について語る場面が挿入されている。『ミドルマーチ』には、信仰も深く、思慮深いドロシアという女性が登場する。ドロシアは、「男性に対する友情の泉」（a fountain of friendship toward men）を持ち、「友達」（friend）になれる人と男性からも評価され、彼女自身も「高尚な心の生き方を理解し精神的なつながりがもてる男性」を求めている。そして夫として許す人に対する心持を言い表すのに「好き」（be fond of）という言葉は適當ではないと語る。²²しかし、判断力と知識があり、精神的つながりが持てると思っていた夫との生活は、ドロシアの心を満たすものではなかった。夫はドロシアの思慮と向学心を尊重はするが、共に歩こうとはしなかったからである。哲もまた、妻となるべき女性に知識と思慮深さを求めながら、自分と似ている光を妻としては考えず、自分の考えを理解できない香に「困ったものだ、女だからわからないのか」と手を焼きながらも共に「ホーム」を築くことを望む。

文明化を目指す社会は、女性に知的で精神的な交際を要求した。キリスト教主義教育は新知識を与え、宗教に基づく「魂」の重要性を説くことによってこれを支える役割を果たすこととなり、その結果、女性は男性と「談話」によって交際し、精神の結びつきを得るようになった。しかし、「薔薇の香」はその精神の結びつきの到達点に男女が違うものを見ていたことをも呈示する。女性が知識と「談話」による交際を習得し、「ホーム」を築くための資質を高めても、男性は結局自分と似た女性、つまり対等となるような女性には妻に選ばない。このような男性を前にして光は、「私の如きはあなたと余程似た所が多くってテムペラメント（気質）が合いますまい丁度先刻仰しやった朋友にこそなる、ものでせう」と、哲に同調するほかなかった。お互いに精神的なつながりを見出しても、結婚にはそれだけでは不十分であると感じ取ったからである。

哲が香には抱き、光には抱き得なかった感情とは、女性に対する直感的な欲望、すなわち「熱情」（passion）であった。哲と光の関係が幸福な結婚に至らなかった理由は、「熱情」の欠如にあったということになる。プロテスタント信仰の忠実な実践者であったドロシアが、夫となる男性に対する感情を「好き」という言葉で表すことを否定したように、プロテスタント的な考えでは、「熱情」は否定的に捉えられる。そしてこのプロテスタンティズムに触れた明治二十年代の知識人達には、「日本の恋が肉欲を含み込んだ不潔なもので、西洋の恋愛がより精神的なものだという図式が共有」²³され、“西洋の恋愛”のあり方がよりよいものように扱われることとなった。「薔薇の香」を書いた巖本もこの図式にはまり込んだ一人であったが、哲と光に幸福な結婚の結末を与えなかったことにより、プロテスタンティズムに基づいて掲げられた男女関係の理想と、感情を持つ生身の男女との齟齬も呈示することになったと言えよう。

四、キリスト教とシスターフッド

教育と結婚形態の変容は女性の交際の範囲を広げ、級友との「楽しき交わり」や、異性間の精神的つながりを生んだ。ここで光が級友の中に「朋友」を見出せなかったことを思い起こし、再度女性同士の絆に視点を戻して考えてみたい。平田由美氏によれば、新中間層が出現し女学生の数が増えた大正期の小説に対して、明治二〇年前後の小説における女学生達の共同性は「挫折」するものとして描かれている。「結婚前の娘たちが享受する連帯や友情がシーンとなって点綴されることはあっても、その共同性が彼女たちを運命の魔の手から救い、自らの未来を切り拓くことを支援する力としてプロットを動かすことは

めつたにない]。²⁴

「薔薇の香」における女学生の共同性の欠如は、キリスト教に基づく光の女学の知識を共有する者がいないという点にあった。キリスト教信者の光は、ホームは神の^{たまもの}賚であると理解し、女性が自らを重んじなければ人からの尊敬も得られないと語るが、級友の中に同様の考えを持つ者はおらず、落胆する。換言すれば、光はキリスト教を共に理解する友人を求めたということになる。光の理解者となり空虚感を満たすことができたのは男性であった。「談話」による知的な交際、精神的つながりが男女交際に重心を移行していったことはこれまで述べてきた通りである。しかし、男性が知識の面で女性を先導するという形をとる男女交際において、キリスト教に関して男性が女性に知識を披露することはあっても、入信を勧めたり信仰を共有したりする場面までは見られない。これはどういうことを表しているのだろうか。

キリスト教主義女子教育は、福沢が提唱した、文明社会が理想とする知的談話による交際を支持する役割を果たした。しかし本来の目的は宣教であった。先にも述べたように『女学雑誌』は、キリスト教がいかに女性の地位や生活の向上に影響を及ぼすかを説くことを主目的とした啓蒙的雑誌である。多くの女性が信仰を持ち、連帯して女性の価値を高めることを望んでいた。女性に信仰を広め、信仰による連帯を生む交際が必要であった。

雲峯子によって書かれた「浮雲胸」は、この連帯の萌芽を描いている。共同性はめつたに見られないとされる明治二〇年代の小説において描かれた共同性の第一歩となる二人の女性の絆はキリスト教を軸に結ばれ、「運命の魔の手」から友人を救うのもまた信仰である。端的に言えば、「浮雲胸」は、キリスト教信仰に基づく平穏な家庭生活を取り戻すために友情が働くというプロットとなっている。そしてこの家庭生活の重視こそが、信仰を共有する相手を女性同士に設定する意味を解く鍵となる。

「浮雲胸」には「薔薇の香」同様、女学生達が級友と寄宿舎で談話し「親しき交情」を交わす様子が書き込まれ、その中で「柔和温厚」のしづ子と女権拡張を夢見る「活発の人」なみ子の関係は、性質が異なる二人の珍しい交情として級友にも噂されている。卒業後、しづ子は親が決めた相手と結婚する。生活は夫の飲酒癖と病気のため悲惨なものになってしまう。しかし、キリスト教を信じ続け介護をするしづ子の心に打たれて夫も改心し、平和な家庭を取り戻す。

しづ子は言うまでもなく、模範となるべき「良妻」である。この「良妻」であることは、プロテスタントの世界、米国においては本来、女性の絆—シスターフッド—の核となるべきものであった。近年、一九世紀前半の米国のシスターフッドのあり方は、女性達の日記や手紙から明らかにされているが、その

成り立ちを見ると、まず、女性としての共通経験（妊娠、出産、子育て、あるいは死）や血縁関係による絆、中でも最初に結ばれる母と娘の絆が根本に据えられている。²⁵この母娘関係の中心には〈見習いシステム〉、つまり娘は母の後について家庭生活に入り家政と母性を身につけるというシステムが存在していた。²⁶一九世紀、急速に進行した産業化は、男性を金銭的利益を追求する労働の世界（world）へと駆り出した。母の元で家政を身につけてきた女性には、外で働く男性達が安らげる場所としての家庭（home）を作る役割が与えられた。この性役割は、女性に、良き妻、良き母として心地よい家庭を作っているのだという自負を持たせ、女性達の間には、より良い家庭作りを目指そうという共通意識が芽生えた。こうして「女性の領域」と、それを礼賛することによる女性同士の絆が生まれることになるのである。

明治二〇年代の日本は、儒教的考えに強く現われていた女子無能観を脱し、欧米に倣って男性と女性の役割分担を強調することにより女性の地位確立を目指した。²⁷女性には、家庭を整えるという重要な責務があるとされるようになった。「浮雲胸」のしづ子が苦勞を乗り越えて得た幸福には、妻が夫を支えて良き家庭を作るべきであるという「女性の領域」礼賛が明確に反映されているわけであるが、しづ子の助力でなみ子が信仰を持ち家庭を立て直した後、二人が新たに交わすようになる交流は、「霊界に真誠の交情をつくす」と表現される。「霊界」、つまり精神における結びつきが女性間に現われる。ここでは女性の性役割の重要性が、精神を重視する女性の絆と並べて置かれていることに注目したい。

女権論の本を出版し有頂天になっているなみ子に、しづ子は「空しき事は凡て打すて、真正の栄えを求め給はん」と手紙を送る。つまり、広く交際して女権を叫ぶことは「空しきこと」であり、平和な家庭こそが女性にとっての「真正の栄え」であると友人に忠告するのである。ここには物質に象徴される〈world〉を「空しき」世界と見て、精神に象徴される〈home〉を神聖視するプロテスタントの考えが現われている。

そもそも「物質」と対比する「精神」の重視は、米国の女性達の入信の発端となったものでもあった。仕事に明け暮れる男性の教会参加が減少すると、教会は女性に参加を勧めた。この時女性の参加の有力な動因となったのは、女性は能力において男性に劣るが精神においては優る、つまりキリスト教に適すると説かれたことであった。女性達は、精神の優越を自覚し、高潔を守るという宗教的使命を共通の目標に掲げ、〈heart〉、〈soul〉、〈spirit〉を基盤とした絆も結ぶようになる。女性同士の絆は肉体を排除するがゆえ世間にも肯定され、異性間の関係よりも崇高とされるほどであった。

日本において、文明開化としての交際とキリスト教主義教育は、肉体を排除し精神を重視するという点において一致していた。しかし前者の内実が知的談話であったのに対して、後者は黙して祈り、言葉を用いない共鳴を求めるものであった。文明開化運動とは、プロテスタントイズムが空しき世界と見た〈world〉の中で進められていくものであった。ここに至って文明社会の交際と、キリスト教主義教育の絆の折り合えない部分が明確になる。そしてキリスト教主義教育における精神的結びつきは、信仰に基づいて家庭を重視する女性達の連帯として表象されていると言えよう。

しづ子の女学生生活は、裁縫に「殊に心を止」め、書物を読むよりも学課の予復習に時間を割き、休日は交際よりも教会に通うというものであった。女の責任について話した教会の説教に「妻は夫に従ふべし」とあるのを聞いて大いに不賛成の意を唱えるなみ子を、しづ子は黙って見守る。宗教を基軸に築かれようとする絆は、談話によって結ばれるものではない。一方、なみ子は自由結婚で伴侶を得、順調な人生を歩むかに見えたが、驕り高ぶった心が夫との不和を招く。なみ子は離縁を言い渡されて初めて、しづ子が告げた言葉、殊に「宗教なき家庭は幸福あらずと云へりし事」に深く感じ入る。キリスト教信仰もまた一種の西洋化であったにもかかわらず、ここにも、「欧化主義に流れる女性は軽佻浮薄で幸福な結婚生活を得られない」というパターンが登場している。「浮雲胸」では、家庭生活の危機を女性の友人の助言で克服するのである。

五、おわりに

明治二〇年代、交際の必要性が説かれると、女性は談話によって知識を交換し共同性を高めることを要求された。日本の女子教育を先導したキリスト教主義はそれを支持する一方で、また言葉を不要とする信仰による絆をも推奨した。

キリスト教主義女学校で、米国のキリスト教信仰を基軸とする絆の影響を受けて結ばれるようになった絆には、やがて西洋のものを受け容れた日本の女学生ならではの断層も生まれる。「神の下に平等」という理念は、生徒達に階級や家に縛られずに交流する魅力を与えるものであったはずなのに、キリスト教への熱意が高まり、教師や上級生への愛情が高じて一定の生徒にのみ特権のようなものができてしまうと、会合の性格を片寄せたり、本当に洗礼を受けようと思わない人にまで洗礼を受けさせたりするようになるのである。

いわばこれも共同性の挫折と言えるかもしれない。このような「挫折」を経

験しながら、女性達の交際はますます盛んになっていく。知識を高めあうことを目標として始まった交際は、キリスト教主義教育に支えられた精神的で対等な絆から、やがて女性同士の肉体の結びつきへの欲求、教育を受けたエリート階級の女性の自負心が生む断層などへと、更なる変容を見せる。また、シスターフッドの基盤となった礼賛すべき「女性の領域」が、女性を縛りつけ社会進出を妨げるものになるという矛盾に直面することともなるのである。

注

- 1 『女学雑誌』の前身『女学新誌』は明治一七年の創刊。なお、本稿では複製版（臨川書店 1966 - 1967）を使用した。
- 2 中山清美氏は「女学生作家の登場—『藪の鶯』、『婦女の鑑』、巖本善治の小説を中心に—」（『名古屋近代文学研究』一六（名古屋近代文学研究会、1998））の中で、女学生を扱った巖本善治の小説について、「典型的な二タイプの女学生を描写、理想と現実の迷いが展開」、「道徳的、目的主義的な巖本の小説が、女学生小説登場の前史」と述べている。
- 3 第一次世界大戦後の未曾有の好景気は新中間層の急激な発展を支え、加えて、大正七、八年にかけての「中学校令」、「高等学校令」、「大学令」の改変が、婦人雑誌、家庭雑誌の中間女性読者層の増加を助長した（黒澤有里子「少女達の地価同盟—吉屋信子の『女の友情』をめぐって」水田宗子編『ニュー・フェミニズム・レビュー2 女と表現』（学陽書房、1991））。このため、従来の研究の多くはこの時期を対象としている。
- 4 赤枝香奈子「女同士の親密な関係にみるロマンティック・ラブの実践」『社会学評論』（vol.56、No.1、2005）参照。
- 5 福沢諭吉『男女交際論』（西澤直子編『福沢諭吉著作集 第10巻』慶應義塾大学出版会、2003）所収 p.120
- 6 福沢諭吉『男女交際余論』（西澤直子編『福沢諭吉著作集 第10巻』慶應義塾大学出版会、2003）所収 pp.140—141
- 7 「女性の朋友」『女学雑誌』124号（1888.8）
- 8 平田由美氏はこうした「女の友情が成立しない」というディスクールが誰によって語られたものであるかについては注意が必要であると述べ、真実なる友人は男子か女子かという議題に関する『女新聞』の記事を取り上げている。平田由美『女性表現の明治史—樋口一葉以前』（岩波書店、1999）pp.242—243参照。

- 9 柳父章『翻訳とはなにか』（法政大学出版局、1976）pp.128-129
- 10 「婦人の会合」『女学雑誌』68号、（1887. 7）
- 11 「麹町女学校で女子交際の談話会」『朝野新聞』（1886. 4. 27）（明治ニュース事典編纂委員会『明治ニュース事典Ⅲ 明治16年-20年』、毎日コミュニケーションズ出版部、1984）
- 12 「お先っ走りの婦人交際会が流行」『郵便報知新聞』（1887. 9. 3）（明治ニュース事典編纂委員会『明治ニュース事典Ⅲ 明治16年-20年』、毎日コミュニケーションズ出版部、1984）
- 13 ウィリアム・サッカレ、三宅幾三郎訳『世界文学全集 7 虚栄の市』（河出書房新社、1957）p.188
- 14 相馬黒光『明治初期の三女性—中島湘煙・若松賤子・清水紫琴』（厚生閣、1940）p.163。ただし俊子の体験した一九世紀末のイタリアが、ヨーロッパの近代化に乗り遅れていた点は付言しておく必要があるだろう。しかし、こうした女性達の交際の様子は英米の小説にもしばしば描かれており、それらにおいても女性達が互いに知的な談話を楽しんでいたようには思えない。
- 15 巖本が校長となった明治女学校の塾生心得書には「塾生は互いに姉妹の如く交際し」という一文が載せられている。
- 16 『女学雑誌』72号（1887. 8）
- 17 『女学雑誌』39号（1886. 10）
- 18 この典型に挙げられるのが花圃の『藪の鶯』である。『藪の鶯』における欧化主義女性の敗北については、「花圃が自由恋愛実行者としての浜子を登場させたことは大胆な試みであったが、彼女に流れている人間の自由意志を健全に発達せしめてやろうとする熱意を持たなかった」と見る意見（塩田良平『樋口一葉研究』中央公論社、1956、p.236）や、「欧化主義の浜子を敗北者たらしめたことは自由意志が放縦に流れてはならないことを言おうとしているのであり、むしろ、自由意志の健全な発達は、服部浪子や、篠原勤や宮崎一郎やそういう反浜子的人物の中に顕著に実現されている」と見る意見（和田繁二郎『明治前期女流作品論—樋口一葉とその前後』桜楓社、1989、p.194）など、様々な読みがなされている。
- 19 この問題を扱っている研究としては、佐伯順子氏の『「色」と「愛」の比較文化史』（岩波書店、1998）、『恋愛の起源』（日本経済新聞社、2000）が挙げられる。
- 20 Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood*, Yale University Press, 1977, p.186
- 21 巖本は『女学雑誌』234号（1890. 10）で『谷間の百合』の翻訳を、「訳者が

- ラブ(恋愛)の情を最も清く正しく訳出」と批評した後、日本の男子は「深く魂(ソウル)より愛するなどの事なく、遵ってかかる文字を最も厳粛に使用したる遺債少なし」と述べている。これについては柳父章『翻訳語成立事情』(岩波新書、1982)「恋愛」の項に詳しい。
- 22 小説「ミドルマーチ」については、ジョージ・エリオット著、工藤好美、淀川郁子訳『ミドルマーチ』1、2(文泉堂出版、1994)、George Eliot, edited by David Carroll, *Middlemarch*, Clarendon Press, 1986を参照、引用した。
- 23 小谷野敦『男であることの困難 恋愛・日本・ジェンダー』(新曜社、1997) p.144
- 24 平田由美『女性表現の明治史 - 樋口一葉以前』(岩波書店、1999) p.114
- 25 これに対して日本は、初期の女学生の代表的な家庭のクラス、つまり近代教育を信奉する中上流の資産家や、新時代の知識を身につけ自活していく必要性を感じていた士族階級に限って言えば母と娘の関係は薄い。彼女達は「(父は母を)心から愛して居ても尊敬することを知りませんでした。それで遂に子供までが母を幾分軽視し、その長所の表情を真似なかったという訳になって参ります。」(鳩山春子『我が自叙伝』、日本図書センター、1997、pp.45-46)、(結婚が決まって妻となるべき修練を積んでいる時、ようやく)「ことのほか親しみあったように思い」、「目に見えない絆が二人の心を結びあわせてくれた」(杉本鍼子著、大岩美代訳『武士の娘』、筑摩書房、1994、p.116)と回想している。また、花圃の『藪の鶯』には、田舎育ちで一通りの読書きも覚束ない母を「いとど見落としつゝ、教育なき女子は仕方なしなどと。口に出ていふ」娘が描かれる。
- 26 Carroll Smith-Rosenberg, *Disorderly Conduct; Visions of Gender in Victorian America*, Oxford University Press, 1985, pp.64-66
- 27 近代の良妻賢母主義については、天皇中心の家族国家主義思想に表される日本独自の女性像であるとする深谷昌志氏(『増補 良妻賢母主義の教育』黎明書房、1990)、国家の価値づけとして賢母論が良妻論より強く唱えられたとする小山静子氏(『良妻賢母という規範』勁草書房、1991)など、戦争や国家主義と絡めて論じられているが、明治二〇年前後の『女学雑誌』の傾向としては、産業化による男女の役割分担とキリスト教に基づいた家庭の重視が中心となっている。

